

第十七章
ワクチンの棚卸し

「少子化推進担当大臣に任せるのではなく若い男性に一念発起してもって婚姻率をあげてもらおうとしてじゃ、高齢化社会推進担当大臣は首にすべきじゃないのう」

「大家さんがそんなこと言うなんて」

田中が驚く。すると山本が冷たく解説を始める。

「少子化推進担当大臣と高齢化社会推進担当大臣の両担当大臣のおかげで健康保険や年金保険などいわゆる公的保険制度の耐久力が試される社会実験が続いています」

田中が「待った」をかける。

「実験？　すでに破綻している」

「いいえ。実験は続いています。この実験を興味深く見つめている国もあります」

「そんな国なんかあるはずない」

田中が反論するが山本は自信ありげに首を横に振る。

「その国は中国です。ほかにも数力国あります。開発途上国が裕福になると陥る罠が『少子化高齢化人口減少社会』です。衛生状態がよくなり医療が充実すると寿命が延びます。乳幼児の死亡率も減ります。一方より豊かな生活を望むから結婚を考える若い人が少なくなりました。仮に結婚しても子育てを敬遠するので子作りしません。このように乳幼児の死亡率が下がっても出生率が上がらないので高齢化人口減少社会が形成されるのです」

田中は同意しなくなかったが例の台詞を吐く。

「なるほど」

ここで山本ではなく大家が話を戻す。

「はて中国か。長い間『一人っ子政策』を推進してきたツケが回ってきたのじゃ」

「もう何度も話題になっているけれど、人類はこれからの生き方を考え直さなければならないわ」

「そうだな。多少不自由だけど地球に優しい生活をしなければ」

「とは言っても厳しいぞ。自然と闘うことによつて寿命を延ばし乳幼児の死亡を抑えてきたのじゃ。そして便利な生活を享受しておる」

「治山治水をして安全に暮らせるようになったし、どこにだって行けるようになったなあ」

「宇宙旅行も夢じゃなくなったわ」

「じゃが、今までなかった大災害が発生しておるぞ。一見自然災害に見えるがわしには人的災害の方が多いように見える」

「大家さんの言うとおりだ。エネルギー問題で大戦争を二度もした。今もエネルギー問題、資源問題、水や食糧問題で争奪戦が繰り広げられているなあ」

「ここで再び少子高齢化人口減少が問題になるの」

山本が大家をのぞき込む。

「何か、わし、悪いことでもしている気分になってきた」

「何も大家さんを責めているわけではありません」

「ずばり老害じゃろ」

「滅相もない！」

山本が大声を上げて否定するが大家は大笑いする。

「顔に書いてあるぞ」

田中が山本の顔を見つめるが文字らしきものはない。

「大家さん、どうしたのですか」

「優先して老人にワクチン接種してくれたり、医療費に配慮してくれたり、年金をくれたり、敬老パスで公共交通機関がタダで乗れたり、本当にありがたいことじゃ。若い人に悪いがわたらのために年金保険や健康保険を過分に負担しておくれておる。しかしじゃ、おかしいと思わんか。一部の年寄りじゃが十分に蓄えを持っておる。もちろん飛びつきりの富裕層と比べようはないが……矛盾しているとは思わんか？」

ここで山本が思いきって発言する。

「先が短い恵まれた老人より、若者とは言いませんが恵まれない人々を大事にしなければ未来は明るくなりません。こういうことですか？」

田中が視線だけを大家に固定してテレビに腕を伸ばすと山本の口のチャックを閉めようとす

る。しかし、大家はますます大きな声を上げて笑う。

「もっと極論を言ってもいいぞ」

意外なことに田中が遠慮を忘れて発言する。

「多子低齢化人口増加社会！」

「そうじゃ。人類が生き残るためにはそういう社会が必要じゃ」

「ちよつと待つてください。人口が増えるのはよくないとおもいますよ」

「もちろんそうじゃ。少子高齢化人口減少社会の真逆がいいと言っているのではないのじゃ」

大家がますます興奮する。

山本、田中が戸惑う。特に山本はブツブツと呪文でも唱えるように言葉を一つ一つ選ぶ作業に没頭しているかのようなようだ。やがてみんな皆黙ってしまう。

いつの間にか例の不思議なテレビの電源が落ちたので田中はその横にある普通のテレビの電源を入れて面白そうな番組を探す。

「これはワクチン差別です」

キリツとした濃紺のスーツで身を固めた著名な男性のニュースキャスターが政治家を前に持論を展開している。

「パソコンやスマホを使い慣れている子や孫がいる老人はワクチン接種の予約ができませんが、

パソコンを持っていない老夫婦やガラ携しか持っていない独居老人は予約など取れません。障害者もそうです。『インターネットで予約しろ』というのは弱者には過酷な作業を強いるのです。これを私は『ワクチン差別』と呼んでいます。なぜ市町村の窓口で予約できるシステムを構築しなかったのでしょうか」

ワクチン担当大臣が即答する。

「窓口が混乱するからです。ワクチン接種するかしないかは本人の判断です」

「それは接種したければ『なんとかするだろう』というおごりです」

「そのようなことはありません」

「でも接種の遅れた人が新型コロナウイルスに感染して重症化したり死亡したりしたらどうするのですか。自己責任、あるいは運が悪いと言うことですか」

大家も田中もこのニュースキャスターに注目する。

「他の放送局でも山本さんのような気骨のあるキャスターがいるんだ」

大家がああ不思議なテレビを見つめながら頷く。

「そう言えばこのテレビばかり見ていて普通のテレビとかほかのニュース番組や報道番組を見たことがなかったのう」

「山本さんの気分を害するかも知れないけれど、いろいろな人の意見を聞く方がいいですね」

「山本さんも気づかないことがあるからしれんからのう」

「ところで大家さんはワクチン接種したのですか」

「そこなんじゃ。わしはパソコン音痴なので田中さんに頼もうと思っていたのじゃが、このテレビを見てるとついつい忘れてしもうて……」

「そんな。早く予約しましょう」

「結構痛かったぞ」

「すぐ打ててよかったですね」

「医者には『まだ打っていないのですか』と不思議がられた」

「感染すると重症化するから早いほうがいい」

「確かにそうじゃな」

急に例のテレビに電源が入ると画面に山本が現れる。

「大家さん、田中さん。ご無沙汰していました」

画面に微笑む山本が現れると大家に向かって頭を下げる。

「大家さん。ワクチン接種おめでとうございます」

「大げさじゃな」

「いいえ。ワクチンの供給が急減しました。グズグズしていると接種が先送りになります」

「あれだけ『打て！ 打てい！』と叫んでいたのにか？」

「政府は公表しませんがワクチンの輸入量が減ったのです」

田中が思い出したように憤慨する。

「首相が渡米したときワクチン製薬会社と契約してこの秋までにほとんどの国民に接種できる量を確保したと言ってたのに」

画面が変わってその頃の首相の記者会見ビデオが流れる。

「とりあえず国民すべてに接種できるだけのワクチンを確保しました。最初は少量ですが心配はいりません」

記者から次々と質問が入る。

「どこの国もワクチンを欲しがっています。本当に必要量が確保できたのでしょうか？」

「日頃からアメリカとの信頼関係を重視しています。製薬会社の社長には直接お願いしました。すぐさま必要量の確保の確約を得ました」

総理が胸を張って記者たちの顔を余裕綽々で見渡す。その中に山本がいるのに気づいて表情が変わる。総理の視線の異常に気づいたワクチン担当大臣が側近に耳打ちする。しかし、山本は指名など無視して勝手に質問する。

「もちろん契約書は交わされたのでしょうか。公表していただいけませんか」

さすが「差し控え総理」と揶揄される総理。ここは凌ぐ。

「相手の立場もあるので公表は差し控えさせていただきます」

山本はすぐさま突っ込む。

「と言うことは契約書はあると言うことですね？」

しかし、百戦錬磨の総理は山本の押しをまともには受けない。

「それも含めて差し控えると言うことです」

「と言うことは契約書を作成していないかも知れないと言うことですか？」

総理は山本の質問に答えずに会見進行役がいるのも忘れて視線を移す。

「次の質問は？」

総理の視線をすくいあげるように大手新聞社のベテラン記者が手を上げる。

「当初の供給量は少ないと言うことですが、初期の接種対象者はやはり医療関係者でしょうか？」

日頃から政府に付度する記者らしくほぼ台本通りの質問をする。

「担当大臣から説明をさせます」

総理は笑みを浮かべながら手柄を誇示できたことに満足しながら一礼した後会見場を後にする。

「結局、口約束だったのか」

「そりゃ、そうじゃろ。臨床試験で好成绩をあげていると言っても新薬じゃ。一年後の供給まで約束することなどできるはずないじゃろ。マスクのようなわけにはいかんのじゃ」

「マスクですら安定的な供給体制を作るのに半年もかかったなあ」

「たとえ国民を安心させるためだと言っても許されるものではないわ。その場しのぎの保身なramottteのほか、いえ、詐欺だわ。まるで誇大広告そのもの。犯罪に近いわ」

山本の興奮した意見に田中も大家も驚く。

「これでまた記者会見場から閉め出されますね。せつかく復活したのに」

「付度するのが記者の仕事なら、もうたくさんです。あのとき誰も総理にエビデンスを求めませんでした。そんな記者会見を誰が視聴するのですか。国民は完全に信用しなくなります。その負の影響は計り知れません」

「そうか。ところで山本さんのテレビ局の目的は何じゃ？」

「政府が公表しない情報を白日の下にすることです」

ここで大家が残念そうに首を横に振る。

「わしは山本さんが正確無比な情報を提供しようと政府の行動を厳しく検証していることに敬意を持っておる。しかしじゃ、山本さんの言う情報を国民に伝える事ができる道具はこのテレビだけじゃ。しかも視聴者は田中さんとわしだけじゃ」

山本の身体が電気ショックを受けたようにしなると震え出す。

「記者会見場でのあの突っ込みができなくなると、ますます誰も記者会見を見なくなってしま
う」

田中も付け加える。

「このテレビ、なぜ一台しかないんだろ」

「真実を伝えるのが目的なら一台で十分だと言うことなのか……分からんのう」
画面のなかでは山本がうずくまって涙を流し続ける。

「地方自治体が持っているワクチンの在庫量が明らかになりました」

元氣を取り戻した山本が張りのある声で大家と田中に語りかける。

「まだ公表されていませんが、アンケート調査するまでもなく実際の在庫量はすぐ判明しまし
た。もちろん予約分は除いてあります」

「当たり前じゃろ。それにワクチンは二種類しかないし国から両方のワクチンをもらっている
ところはない。それにでかくもないし嚴重に冷蔵庫で保管されておる。在庫を数えることを棚
卸おろしと言うが、実際に一つ一つモノを確認する方法、実地棚卸が基本とされておるのじゃ。つ
まりじゃ……」

田中が割って入る。

「実地棚卸？」

「……現物を数える事じゃ。税務署の調査官がよく言う。『きちんと実地棚卸をしましたか。数をごまかしていませんか』と」

「大家さんの言うとおりです。厚生省ではなく大蔵省がやれば間違いはなかったはずです」

「結局厚生省は各都道府県の在庫量を多く見積もって『そんなに在庫があるのなら配るのを減らします』なんて言うから現場が大混乱してますね」

田中の意見に山本が追従する。

「予約の受付を停止せざるを得ない自治体が続出しています。厚生省はワクチン確保量の激減の責任を回避するために在庫量をかさ上げしたのです。要は余分にあるので安心しろと首相に付度したのです」

すると田中が憤慨して半ば怒り出す。

「接種報告がすぐ厚生省に届くのなら、供給量マイナス接種件数で在庫が計算できるけれど、当然報告は遅れるし、予約されているワクチンもある。買い物に行って欲しい商品を見つけても『予約済み』という札が付いていたら誰も売り切れたと思う。売約済みの商品売れとは言わないでしょう。それを政府は売る商品があると言い切る。こんなこと小学生でも分かる話じゃないですか。だから僕にだって分かる」

ここで何役もこなせる逆田がワクチン担当大臣として登場すると大家も怒り出す。

「おまえはワクチン供給担当大臣じゃ。ワクチン在庫管理担当大臣を呼べ」

逆田がニヤリとすると咳払いをする。

「在庫管理担当も兼務しております。私どもはスピード感を持って在庫量を調べているのです。実際の在庫を調べるまでもなく供給量から接種量を引けばすぐ在庫が計算されます。とにかくスピードです」

「ほかのことならノロノロしているのに在庫量となると急にスピードが上がるのはなぜじゃ」
ここで田中は重大なことに気づく。

「ワクチン接種は一日百万回が目標と総理が言っていましたよね」

「そうです。今やその目標を大きく上回っています。プラス二十万回の百二十万回に達しています。すごいでしょ」

「どうやって数えているのですか」

「百万回分は接種報告で確認済みです。二十万回分は報告の遅れがあるので推測ですが、現場の状況からするとまず間違いありません」

ついに田中が爆発する。

「じゃあ、なぜ、その二十万回分を在庫に数えるのですか」

担当大臣役の逆田が思わず「なるほど」と言葉を吐く。

「一日あたりの摂取量の話になると胸を張って『こんなにも接種回数が増えた。大したものだろう』と自慢する。でも供給量は何故減ったのかは説明しない」

田中がやる得なそうにうつむくと山本も悲しそうに報告をする。

「供給量が減ったのでかなりの予約が半ば強制的にキャンセルさせられています」

「わしはかろうじて接種できたが、できなかつた人は不安じゃのう」

「それが一番心配なことです」

「こんなことをしていたら、山本さんの言うとおり誰も政府を信じなくなる」

「一番が心配だとすると二番があるのじゃな」

山本は余り気乗りがしないのか間を置く。

「田中さんがまた怒り出すことぐらいバカげた事なんです」

田中が怒る準備をして山本の言葉を待つ。

「接種回数を増やして感染拡大を防ごうと地方自治体は医者や看護師や会場の手配やバスの運行など様々な努力をしました。でもキャンセルです。もちろん市民はキャンセルされた方ですからキャンセル料を取られることはありませんが……」

ここで田中が叫ぶ。

「まず会場費のキャンセル料がいる！ それに……それに……」

と言いかけて泡を吹いて倒れる。

「そう、それだけじゃありません。医療関係者やバス会社にもキャンセル料を支払わなければなりません。それは地方自治体や企業の健康保険組合などの負担になるのです。その額は全国で数億円になると言われています」

泡を甲で拭いながら田中が何か言おうとするが大家がタオルで田中の口を押さえる。

「山本さん。キャンセル料は国が支払うべきじゃろ」

「もちろんそうでしょう。ワクチン供給は国の責任ですから」

「払うのがイヤだからワクチン在庫をごまかすのじゃな」

「そうだ。そうだ！」

田中も同調する。しかし、山本が悲しそうに応じる。

「国がキャンセル料を支払っても結局は税金からなのです」

田中も大家も「なるほど」とは言わない。何とか田中が言葉を出す。

「税金だからいとも簡単に億単位の無駄なことをするんだ。だったら政治家や官僚が支払えばいい。罰だ」

大家が半ば諦めたように弱々しく言う。

「そうなれば誰も政治家や官僚にはならんのじゃ」

「どうなっているんだ。今も政治は」

「本当に国民のために働くと言うことは大変なことだと言うことは分かるんだけど……」

第十七章 ワクチンの棚卸し

テレビから山本の姿が消える。